

## つながりを生み出す図工ワークショップの実践と考察 I

——2019年度の実践を中心に——

佐 伯 育 郎\*

A Prospective Bridge between Student Art Teachers and Communities I:  
Focusing on Art Workshops in 2019

Ikuo SAEKI\*

### はじめに

筆者は、児童教育コース図画工作専修、幼児教育コース図画工作ゼミの学生とともに図工ワークショップを毎年企画・実施している。図工ワークショップの根底にあるテーマは「架橋」つまり「つながり」である<sup>註1)</sup>。ありふれた身近な材料（身近材）を用いた造形活動を介しながら、地域と大学、理論と実践、授業と教育・保育実習、教育・保育実習と教育・保育の現場、美術教育と環境教育との架橋を実現できるよう模索しているところである。図工ワークショップの実践を通して、スタッフである児童教育コース図画工作専修、幼児教育コース図画工作ゼミの学生の実践的研究にも寄与できるだけでなく、教育者・保育者としての資質・能力の向上など、その成長も期待できると考えており、これまでの報告において成果と課題について継続的に言及してきた。

本稿では、2019年度に行われた学外2回（5月・8月）、学内1回（12月）、計3回の図工ワークショップの実践に関する省察をもとに、どのような架橋を試みたのか、その結果どのよ

うなつながりが深まったのか、検証することを目的とする。読者各位の忌憚のないご批評を賜りたい。

### 1. 企業との架橋「ブライダルプロデュース会社とのコラボレーション・ワークショップ」

#### (1) 題材と概要

令和元年（2019年）5月11日（土）10:00から11:30まで、広島市中区三川町にあるブライダル・カフェ、マリーエイド・サードテラスにおいて図工ワークショップ「手作りカーネーションで伝えよう！～お母さん、いつもありがとう～」を開催した<sup>写真1・2)</sup>。



【写真1：会場となったマリーエイド・サードテラス（広島市中区）】

\* 本学教授



【写真2：5月・学外での図工ワークショップの案内を掲載したチラシ】

題材は、身近材であるダンボール、紙コップ、紙テープ、ストロー、色画用紙、折り紙（7.5×7.5 cm）などを用いて作るカーネーションである（写真3）。

2018年12月に行われた学内での図工ワークショップ「クリスマス with コピットモ！～こびとのともだちをつくろう」に参加していただいた保護者（マリーエイド関係者）からの提案に筆者らが賛同し、このワークショップが実現した。この時期にワークショップを行うのは今回がはじめてである。2018年12月に行われた学内での図工ワークショップ終了後、1月中に打診があり、3月頃から企画の検討を具体的に行い、5月の母の日の前日、土曜日の午前中に実施する運びとなった。

今年度の4月から図画工作専修・ゼミ4年生（8人）と筆者とで試作を行い、教材研究を開始した。会場が本学よりも手狭であったため、スタッフは4年生のみに絞った。題材も、母の日に合わせて、母親にプレゼントするカーネーションに決定した。これまでの図工ワークショップの実践を通して導き出した教材研究の

手順は、表1の通りである。今回もこの手順に従って教材研究を進め、作品のコンセプト（概念、方向性、基本となる性格付け）を探った。

【表1：教材研究・題材開発の手順・過程】

順序	教材研究・題材開発の方法
1	試作を通して、基本形を明らかにする。
2	他の方向性を探り、可能性を広げる。
3	対象者に合わせて最終形にまとめる。

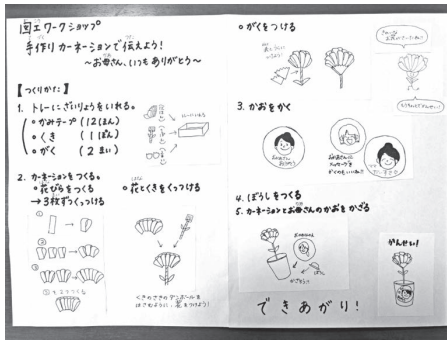
教材研究を通して明らかにしたカーネーションのコンセプトは、表2の通りである。

【表2：カーネーションのコンセプト】

1	土台となる鉢植え（花瓶）の部分に紙コップを用いる。
2	花卉に紙テープを用いる。
3	茎にストロー、マスキングテープを用いる。
4	鉢植え内部の花の固定や <sup>がく</sup> 萼の部分にダンボールを用いる。
5	鉢植え（花瓶）に母親の似顔絵、折り紙の帽子を貼り付ける。

今回は作品制作の時間が実質70分であるため、対象者である幼児・児童が時間内に完成させられるものを目指した。コンセプトの5において、母親への感謝の気持ちを表現することができるように母親の似顔絵や母親宛のメッセージを添えることで心象性も強調した。試作を通して、基本形が完成した。開催直前には材料・用具の準備も行った。作る際に手間と時間がかかる茎や<sup>がく</sup>萼は、あらかじめ学生が用意した。材料・用具も、事前にトレイやボックスに入れるなど、大学から運びやすいだけでなく、会場にも配置しやすいように工夫した（写真4）。

教材研究をもとに、作り方を示したプリントも作成した（写真5）。当日プログラムの検討も行い、次のように決定した。



【写真5：学生スタッフによるカーネーションの作り方プリント】

【表3：5月・学外の図工ワークショップ当日プログラム】

1	はじめのごあいさつ・導入の芝居	5分
2	作品づくり	70分
3	終結の芝居・おわりのごあいさつ	10分
4	記念写真の撮影	5分

会場は、ワークショップで使用する以外のスペースがカフェとして通常営業しており、自然光が入りやすく照度の高い室内であるため、スクリーンは用意できるが動画などを投影することが難しい。そこで、導入と終結において学生が父親、母親、子どもを演じる芝居をその場でを行い、動機付けとまとめとすることにした。折り紙を演示（示範・実演）する際もICTを活用せず、掲示物や大型の折り紙を用いて参加者に示すこととした。

## （2）成果と課題

成果としては、2019年度前期中の5月に行う点、学外しかも街中のカフェで行う点、企業との協働であった点、すべて初の試みであったため、学生スタッフ・筆者ともに新鮮な印象を持ち、意欲的に取り組むことができたことが挙げられる。2018年12月に行った学内の図工ワークショップは3時間にも及ぶものであったため、

90分という時間設定も無理がないものであり、時間内に完成させることのできたカーネーションの題材も適していた。季節・行事にも合わせていたため、参加者の動機付けも高めやすいものであったと考える。

課題としては、親子10組の定員であったにもかかわらず、参加者が親子4組に留まった点である（写真6）。マリーエイドでは様々なワークショップが行われているが、筆者らが行うのははじめてであり、アピール度が足りなかったのではないだろうか。親子1組に2人の学生がついたため、手厚く支援ができた点では、結果的には奏功したと考える（写真7）。今後、同様の機会があるとするなら親子5組にすると適切なのではないだろうか。筆者の自家用車を用いて大学から材料・用具を運んだが、運搬しやすいように工夫していたため、大きな負担ではなかった。学生スタッフは現地に集合させ、会場で合流したが、交通の利便性が高い会場であったため、比較的参加しやすかったといえる。

参加者（4組のご家族の代表者）にA4サイズ1枚のアンケート用紙を用いて図工ワークショップの満足度について質問した。「とてもよかった よかった よくなかった とてもよくなかった」の4段階で回答して頂いた。4組とも「とてもよかった」と回答して下さった。今後、このようなコラボレーション企画の図工ワークショップに参加したいかどうか、「はい いいえ」で回答していただいた。4組とも「はい」と回答していただいた。今後も、同様の試みを前向きに検討し、企業との架橋を継続していきたい。

## 2. 博物館との架橋「ふくやま草戸千軒ミュージアム（広島県立歴史博物館）とのコラボレーション・ワークショップ」

### (1) 題材と概要

令和元年（2019年）8月18日（日）10:00から12:00まで、福山市西町にあるふくやま草戸千軒ミュージアム（広島県立歴史博物館）において図工ワークショップ「浮世絵 de コビットモ！」を開催した。

2018年12月に博物館関係者からいただいた提案に筆者らが賛同し、このワークショップが実現した。令和元年度夏の企画展 開館30周年記念「世界が絶賛した浮世絵師『北斎』」の開催に伴い、浮世絵に関係したワークショップを5コマ行うこととなった。そのうちの1コマを、筆者らが担当した。



【写真8：北斎展（ふくやま草戸千軒ミュージアム）】

2019年に入ってから企画の検討を行い、2018年12月に行った学内での図工ワークショップをアレンジして実施する方向性でまとまった。5月の学外での図工ワークショップが終了してから準備に入った。本格的な教材研究を行ったのは7月に入ってからであった。図画工作ゼミ4年生が「北斎展」の図録を参照しつつ、和柄の折り紙を活用して和風にアレンジしたコビットモ<sup>註2)</sup>を制作した。その後、筆者も別タイプの

作品を制作し、これらを参考作品として提示することにした（写真右下、鎧を着ている武者風コビットモは、図工ワークショップ当日参加者の子どもと同時に筆者が作ったもの）<sup>写真9)</sup>。

コビットモを和風にアレンジする方法を示したプリントの作成、当日プログラムの検討も事前に行った。決定したプログラムは、次の通りである。

【表4：8月・学外の図工ワークショップ当日プログラム】

1	はじめのごあいさつ・題材説明	5分
2	作品づくり	105分
3	記念写真の撮影	10分

当日の進行は、主に筆者が行った。作品づくりの際は、図画工作ゼミ4年生2人と筆者が参加者の指導・支援を行った。

### (2) 成果と課題

成果としては、博物館との協働であった点、展覧会との提携であった点など、学生スタッフ・筆者ともに新鮮な印象を持つことができた点が挙げられる。筆者にとっては同様の経験はあったが、学生にとっては初の試みであったため、特に意欲的に取り組んでいた<sup>註3)</sup>。参加者（3組のご家族の代表者）にA4サイズ1枚のアンケート用紙を用いて図工ワークショップの感想をお聞きした。参加者からは「トイレットペーパーの芯を使って愛らしいコビットモができるなんて驚きです。想像力が広がり、遊び方も様々で本当に楽しかったです。先ず、コビットモというネーミングでコビットモって何だろうと好奇心がくすぐられ、とても楽しい時間を過ごすことができました。ありがとうございました。」という感想をいただいた。参加者からは、肯定的に受け止めてくださったようであっ

た。コビットモという既に関済済みの題材ではあったが、展覧会に合わせてテーマを変え、再構成することで可能性が広がるということを実践を通して学んだ。参加者は素敵な作品を完成させており、筆者らも得るものが多かった<sup>写真10</sup>。

課題としては、博物館には事前に広報をしていただいたのだが、筆者が設定したワークショップのタイトルが伝わりにくかったこともあり、定員が親子10組であったにも関わらず、3組のみの参加に留まった点である<sup>註4</sup>。学生・筆者が各親子にそれぞれつuitたため、手厚く支援することはできた<sup>写真11</sup>。当日の参加者からは「コビットモって何だろうと思っていました。なぜでしたが、親子で楽しみにしていました。」という意の言葉を直接いただいた。一般に伝わりやすくするためにはタイトルに副題を付けるべきであったが、謎めいた部分があることでかえって興味・関心を持たせることはできたようであった。大学から会場までが遠距離であったため、材料・用具の運搬、学生スタッフの移動（現地集合）は大変ではあったが、貴重な経験となった。

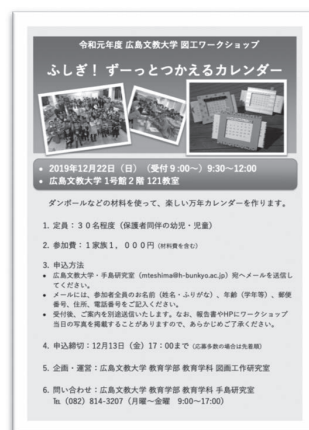
要望があれば、これからも無理のない範囲で学外のワークショップも実施していきたい。何らかの形で、博物館や美術館などの文化施設との架橋を継続していきたい。

### 3. 地域との架橋「学内におけるワークショップ」

#### (1) 題材と概要

最後に、学内における図工ワークショップについても考察する。令和元年（2019年）12月22日（日）9:30から12:00まで、本学1号館2階121教室において図工ワークショップ「ふしぎ！ ずーっとつかえるカレンダー」を開催した。

今年度は、ダンボールを用いた万年カレンダーを題材にすることに決定した。元号が令和となったこと、オリンピックイヤー2020年を迎えること、開催日が年末に近くなり、新年の到来を意識する時期であることなどを考慮し、カレンダーを題材として選出した。家庭で長く使用して欲しいという理由から、単年度のものでなく、継続して使用できる万年カレンダーにした。ダンボールでフレームを作り、その内部にカレンダーの用紙を貼ったダンボールを挟むものであり、万年カレンダーを略して「マンネンダー」と図画工作専修3年生が名付けた。

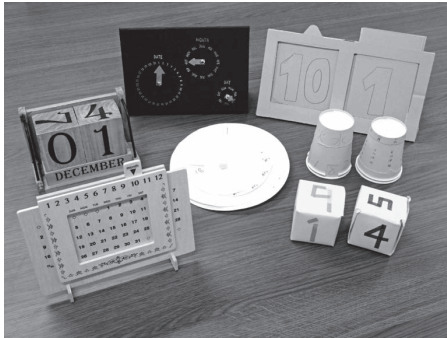


【写真12：12月・学内の図工ワークショップのチラシ】

カレンダーにも、壁掛けタイプや卓上タイプ、日めくりタイプや月めくりタイプ、冊子タイプやブロックタイプなど、様々なものが存在する。まずは、市販の万年カレンダーを取り寄せて調査するとともに、紙バック、紙皿や紙コップなどを用いて、教科教育学演習Ⅱや幼児教育学演習Ⅳなど図画工作専修・ゼミの授業で試作をはじめた<sup>写真12</sup>。

前出の表1の手順による教材研究を通してマンネンダーの基本形を探り、そのコンセプト（概念、方向性、基本となる性格付け）を明らかにしていった。コンセプトは、表5の通りであ





【写真12: 既製品（左）と試作品（右）の万年カレンダー】

る。教材研究の結果、主材料にダンボールを用いた卓上タイプ、曜日を固定して日付をスライドさせるタイプに収斂していった。学生・筆者によって様々なマンネンダーが生み出されていった。折り紙や色画用紙で細工を施したペーパークラフトタイプ<sup>写真13</sup>、動物などの顔をしたフェイスタイプ<sup>写真14</sup>、色鉛筆や水彩絵の具で描画したドローイングタイプ（左下は着せ替え可能なタイプ）<sup>写真15</sup>、標準的・正統的なオーストリアタイプ<sup>写真16</sup>、マスキングテープやクラフトパンチで切り抜いた紙などを貼るアフィックスタイプ<sup>写真17</sup>、スパンコールやビーズなどで装飾するグリッタータイプ<sup>写真18</sup>の6種に分類できた。試作後、児童教育コース図工専修2年生が作り方のプリントを作成し、当日に備えた。

【表5：マンネンダーのコンセプト】

1	カレンダーのフレームとベースには、ダンボールを用いる。
2	カレンダーの部分をスライドさせることで日付を調整する。
3	装飾には、色画用紙や折り紙など様々な材料を用いる。
4	厚紙とダンボールを用いたスタンドで立たせる。
5	月は、別のパーツにして表現する。

次に、マンネンダーと、過去の題材とを照ら

し合わせて共通点と相違点について検討する。類似性の高い2011年度の題材「でこふれ（デコレーション・フレーム）」との比較を試みる。

【表6：2011・2019年度の題材比較表】

実施年度	題材名	主材料	用途・機能
2011	でこふれ（写真立て）	ダンボール	①壁に取り付けたり吊り下げたりして飾る ②中に写真・ポストカードを入れる
2019	マンネンダー（万年カレンダー）	ダンボール	①卓上に立てて飾る ②使う（日付を確認する）

まず、共通点から考察する。フォトフレームである「でこふれ」は、マンネンダーと同様に基本形状が矩形である。ダンボールを主材料に用いていることも共通している。マンネンダーで使用した型紙は、「でこふれ」の準備の際に作ったものである。「でこふれ」では、写真サイズ（Lサイズ 89×127 mm の写真を入れる）とポストカードサイズ（基本的に郵便はがきサイズ 100×148 mm のものを入れる）を入れるためのカードケースをダンボールのフレームに接着させるために、ダンボールに当てて切るための型紙を2種用意していた。そのうちの1つ、ポストカードサイズの型紙をそのまま流用した。フォトフレームと万年カレンダーという違いはあるものの、用途・機能があるデザイン的な題材である点は共通である。ダンボールでできたフレーム表面に装飾できるという点でも共通している。

相違点としては、フォトフレームと万年カレンダーという用途・機能の違いがある。どちらも、それ以外の特別な用途・機能はないというシンプルな題材であることは同様である。「でこふれ」には裏面にマグネットやモールが取り付



絵の具の色紙屋さんでは、水彩絵の具を用いた技法遊びによってあらかじめ模様を付けた画用紙を置いていた。技法遊びには、スパッタリング、ドリップング、マスキングなどを用いた。こちらも多くの参加者が活用していた。塗り絵屋さんでは、今回のキャラクターであるワスレンダー（写真24右側）を描いた塗り絵を用意した。

次に、当日のプログラムについて言及する。午前中の開催となった今回は、以下のプログラムで実施した<sup>表7)</sup>。昨年度が3時間を越えたため、従来行ってきた歌唱などアトラクションの一部を割愛し、なるべく簡潔になるよう改善した。午前中の開催であることを考慮するとともに、メニューが多過ぎるとねらいがぶれてしまうと考えたからでもある。

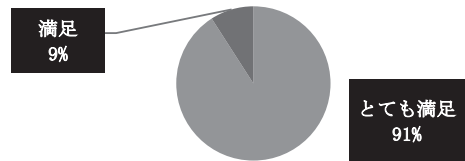
【表7：12月・学内の図工ワークショップ当日プログラム】

1	はじめのごあいさつ	2分
2	ペープサートによるビデオレター①	3分
3	コーナー紹介	5分
4	作品づくり①	50分
5	休憩・コーナー利用	10分
6	作品づくり②	60分
7	ペープサートによるビデオレター①	3分
8	おわりのごあいさつ	2分
9	記念写真の撮影・アンケート記入	15分

## (2) 成果と課題

次に、今年度の成果と課題を明らかにする。参加者対象のアンケートを根拠として活用し、評価を行う。まず、参加者（11組のご家族の代表者）に学生スタッフ・筆者の対応に対する満足度について質問した。「とても満足 満足 不満 とても不満」の4段階で回答して頂いた。グラフ1の結果となった。理由としては、学生

たちが優しく丁寧に教えてくれたからという回答が見られた。学生スタッフの対応については、好印象であった。



グラフ1 【2019年度・対応への満足度（参加者）】

昨年度の省察をもとにして、図工ワークショップにおける指導・支援の在り方を表8にまとめた。図工ワークショップには、事前に子どもの実態がわかっている通常の保育・授業とは異なる難しさがある。この原則をもとに実践を進めると、参加者、学生スタッフ双方の抵抗を軽減でき、満足度も高まるのではないかと考えている。学生スタッフに表8を資料の一部として事前に配付し、当日に備えた。表8をもとにした学生スタッフの支援・対応が奏功したのではないかと推察する。

【表8：図工ワークショップにおける指導・支援の在り方三原則】

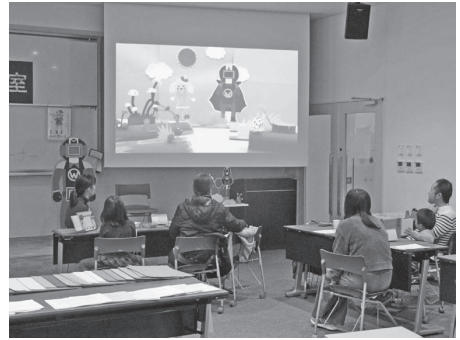
原則	指導・支援の具体的な方法
1	子どもにできることはさせて、できないことは手助けする。
2	予想外のことには、臨機応変に対応する。
3	同時に作品を作るなど、伝わりやすい工夫をする。

次に、開始時・終了時に上映したビデオレター、今回の題材マンネンダー、開場に展示したワスレンダー・マンネンダーのパネル、以上3点に対する満足度について質問した。「とても満足 満足 不満 とても不満」の4段階で回答して頂いた。グラフ2の結果となった。

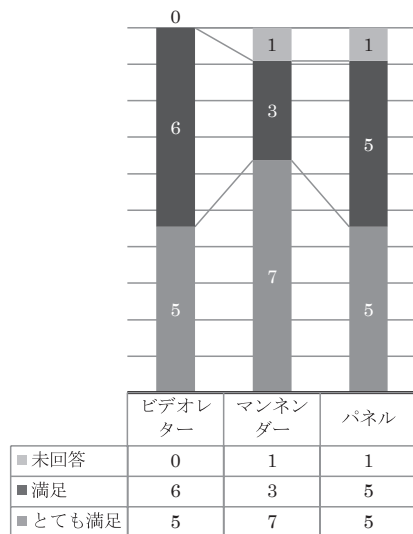
まず、ビデオレターに対する評価の理由としては、キャラクター化して子どもたちの興味と



目的を引き出す工夫ができていた、ストーリーがわかりやすく楽しく作業ができていたという回答があった。かわいいキャラクターに子どもが食いついて見ていたという記述も見られた。今回のビデオレターに学生は登場せず、代わりにペープサートを用いて演じることにした<sup>写真21</sup>。登場したのは、図工アイドル・アーティ（図画工作専修・ゼミのマスコットキャラクター）に加えて、新しいキャラクターである暦<sup>こよみ</sup>知らん士「ワスレンダー」、暦<sup>こよみせん</sup>戦士「マンネンダー」であった。2体の新キャラクターは、学生スタッフのアイディアをもとに、生み出されたものである。ビデオレターの進行役としてアーティが登場し、学生スタッフによるナレーションによる補足説明も入れた。暦知らん士「ワスレンダー」と暦戦士「マンネンダー」は同一人物であり、カレンダーのない世界の住人であるワスレンダーが、参加者が万年カレンダーを完成させることによって、その力でマンネンダーとして生まれ変わるという設定であった。ビデオレターは昨年度も用いたが、演者がやや早口であった点、時間が42秒と短かった点、場面のつながりがわかりにくかった点が課題として挙げられていた。昨年度は、導入時のみの活用であった。今回は、導入時だけでなく、終結時にも動画を用意し、導入と終結とで内容が対応するように仕上げた<sup>註5</sup>）。ビデオレターの時間も、導入で1分3秒、終結で1分22秒と、前回よりも長めに撮影・編集することで、動画の内容が参加者に伝わりやすいよう改善した。撮影・編集を担当した児童教育コース図工専修3年生が登場人物の名前のテロップや効果音を入れ、参加者にわかりやすく仕上げた。演者であった幼児教育コース図工ゼミ3年生も、声色を使うなど工夫してくれた点も評価が高い一因であると筆者は考える。



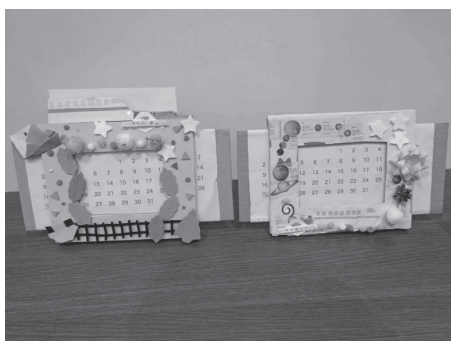
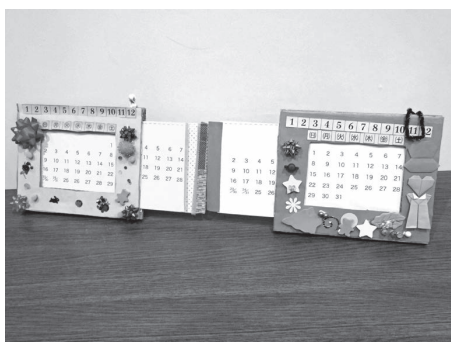
【写真21：導入時でのビデオレター①上映中の様子】



グラフ2 【2019年度の工夫（参加者）】

今回の題材マンネンダーに対する評価の理由としては、家庭で使用できるものであり、12月という時期にも合っていたという回答も見られた。幼児・児童でも楽しみながら制作できたという回答があった。残しておきたい宝物のような作品だという記述もあった。参加者の作品には、前述のお店屋さんで用意していたものを活用し、装飾して仕上げたものが多かったが、部品の構成にも参加者の個性が表れていた<sup>写真22・23</sup>）。折り紙の新幹線を活用していた親子は、電車が好きなので親子ともに楽しめたと回答していた。中には、あらかじめ用意していたカレンダーの用紙を使用せず、日付を手で書

いていた参加者の男児もいた。保護者に理由をうかがうと、平生から数字を書くのが好きだからということであった。参加者の事後アンケートには、今回の題材は家で使うことができるものであるし、平面的な工作であるため幼児でも楽しむことができていたという記述もあった。「年中の息子がここまで仕上げたのははじめてであり、達成感が大きかった。」という保護者の記述もあった。あらかじめダンボールの部品を用意していた点も、怪我を回避できただけでなく、子どもが飽きる前に飾り付けに入れたのでよかったという回答もあった。自宅で使用できる点で題材自体も好評であったが、お店屋さんを用意した点、装飾面においても評価が高かった。



【写真22・23：参加者によるマンネンダー】

続いて、パネルについて検討する。パネルとは、暦知らん士「ワスレンダー」の顔出しパネルのことである<sup>写真24</sup>。ダンボールと色画用紙を用いて、図画工作専修3年生と筆者とで制作したもので、ワークショップ当日は会場全面に設

置していた。昨年度までは、ワークショップ後半に学生スタッフが扮した図工アイドル・アーティなどが登場していたが、その代わりに顔出しパネルを通して参加者との交流を図ろうと試みた。顔出しパネルは様々な観光地に設置しており、写真撮影のスポットにもなっているため、ワークショップにおいても写真撮影用アイテムとして活用することをねらった。ワークショップ後半では、ビデオレター上映後に暦戦士「マンネンダー」のパネルも登場し、参加者の記念撮影に使用した<sup>写真25</sup>。パネルを活用する場面はワークショップ全体の中では少なかったが、参加者の評価は比較的高く、印象に残ったのではないかと推察する。

その他の課題としては、万年カレンダーが何月でも使えるという意味を子どもたちに伝えてから制作にかけると、大切に使えるという意欲がより高まったのではないかと参加者からの意見があった。大変参考になる意見であり、万年カレンダーの意義を導入時に強調すべきであったと省察した。

お店屋さんは総じて好評ではあったが、塗り絵屋さんだけ参加者の利用度が低かったことも課題として挙げられる。塗り絵をした後、ハサミで切り取り、マンネンダーに貼って装飾することを筆者らは意図していたが、純粹に塗り絵として楽しむ参加者が殆どであった。その他のお店屋さんは、マンネンダーの装飾だけでなく、参加者と学生スタッフ、参加者同士の交流にもなっていた様子が見られた。

学生スタッフ対象の事後アンケートでは、物的環境に対する指摘が主に挙がっていた。例えば、手拭きなどが不足していた点、机が子どもたちには高かった点、椅子にストッパーがなかった点などが挙げられた。今回から新しい1号館を会場に使用したが、机や椅子などに対す

確認不足が反省点として挙げられた。しかし、旧1号館に比べると会場が広く、動線にゆとりがあり、比較的活動しやすかった。机や椅子にキャスターが付いているため、会場設営と原状復帰もしやすかった。開催時期の設定も例年より遅くなったため、改善していきたい。

#### 4. 今年度の実践で生まれたつながり

本稿では、今年度に行われた学外2回、学内1回、計3回の図工ワークショップの実践に関する省察を行った。どのような架橋を試みたのかは、以下の通りである。

##### 【今年度試みた架橋】

- ①企業との架橋
- ②博物館との架橋
- ③地域との架橋

その結果どのようなつながりが深まったのか、筆者なりにまとめると次のようになる。

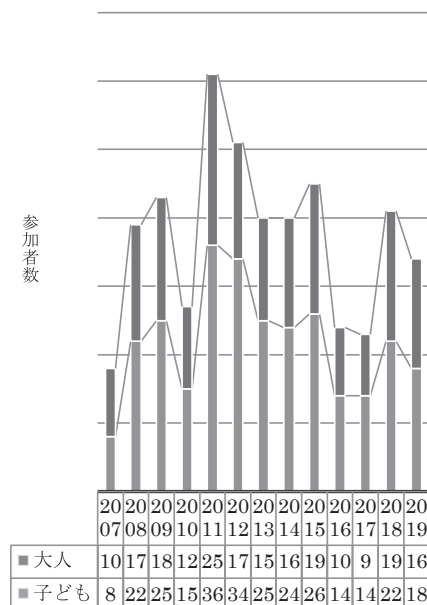
##### 【今年度深まったつながり】

- ①地域・社会とのつながり
- ②実践・題材のつながり
- ③参加者とスタッフ、参加者同士のつながり

山内祐平は「創ることを目的とし、学びを付随する結果としてとらえているワークショップと、学ぶことに主眼があり、創ることを方法として採用しているワークショップがあるが、これは重点の置き方の差であり、創ることを学ぶことは後述するように表裏一体の関係にある。」<sup>引用1)</sup>と述べており、筆者も同意見である。図工ワークショップにおいては、参加者にとっては「創ることを目的とし、学びが付随する」ものであり、学生スタッフ・筆者にとっては「学ぶことに主眼があり、創ることを方法として採用する」ものと考えている。課題・反省点はあるものの、山内祐平が述べるような役割を、今年度の取組がある程度果たすことができたの

ではないかととらえている。

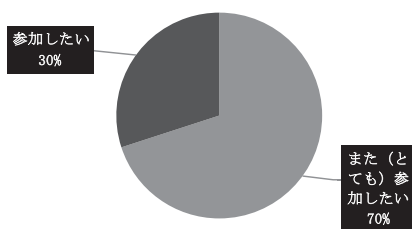
今年度の学内の図工ワークショップ参加者は34人（子ども18人、大人16人、全11組）であり、欠席は2組であった。そのうち1組は保護者の代理の方が参加された。会場の広さと学生スタッフ人数との関係から、定員をこれまでの40人から30人に改めたが、定員を超えた参加があった。学内における13年分の図工ワークショップ参加者推移をまとめると、グラフ3になる。平均約37人の参加者がある。リピーターは全11組中7組の参加であった。リピーターの存在によって支えられていることを改めて認識した。参加者の感想には、前回（2018年度）が楽しかったからリピートしたという回答が散見された。毎回、題材を変えるなどの新たな工夫をしてきたことが、リピーターの獲得にもつながっているのではないかと考える。昨年度まで会場として使用していた1号館が取り壊され、環境が一変したが、変わることなく参加してくださる方がいる限り、継続する意義はあるといえる。



グラフ3 【参加者の推移（2007～2019）】

2009年度から図工ワークショップを継続してきたが、学生スタッフのメンバーは卒業を迎えるため流動的であり、未だ多くの課題はあるものの、実践の積み重ねによってある程度熟達化してきたと言えるのではないだろうか。安斎勇樹は、熟達の質を高めるために実践者が持つべき学習態度として「新しい経験に対して開かれた冒険心を持ち、新しい仕事に挑戦すること」「他人の意見に耳を傾け、新たな考えを取り入れる柔軟性を持つこと」が必要であると述べている<sup>引用2)</sup>。伝統を大切に部分と、安斎勇樹が言うように新しく挑戦する部分とを双方大切にしていきたいと筆者は考える<sup>註6)</sup>。

参加者のアンケートでは、来年度、図工ワークショップを開催することになったら、参加したいかという設問に対して、「とても参加したい 参加したい どちらでもない あまり来たくない 来たくない」の5段階で回答して頂いた。以下のような肯定的な結果となった。図工ワークショップが様々なつながりを生み出すものと筆者は考えるため、今後も学生スタッフとともに着実に継続していきたいと考える。



グラフ4 【来年度図工ワークショップに参加したいか】

#### 謝辞

学内及び学外の図工ワークショップにご参加の皆様、ご協力くださいましたマリーエイド・サードテラス様、ふくやま草戸千軒ミュージアム様、学園統括部、初等教育学科・教育学科、広島文教大学附属幼稚園、関係各位に心より感謝いたします。貴重なコラボレーションの機会を与えてくださった山中愛様、株式会社 Share Clapping マネージャー木村理恵様、ふくや

ま草戸千軒ミュージアム石橋健太郎学芸員様に感謝いたします。参加者との連絡、ホームページ関係でお世話になりました教育学科助手・手島真美先生、関係各位に図工ワークショップの案内を掲載して頂きました地域連携室・金子留里室長、園児・保護者に案内を配付して頂きました広島文教大学附属幼稚園園・栗屋一校園長に感謝いたします。本当にありがとうございました。

#### 参考文献

- ・新野貴則・福岡知子編著『明日の小学校教諭を目指して 子どもの資質・能力を育む 図画工作科教育法』萌文書林、令和元年
- ・細見 均『絵心がない先生のための図工指導の教科書』明治図書、平成29年
- ・樋口一成編著『幼児造形の基礎 乳幼児の造形表現と造形教材』萌文書林、平成30年

#### 引用文献

- ・引用1) 山内祐平・森 玲奈・安斎勇樹『ワークショップデザイン論—創ることで学ぶ』慶応義塾大学出版会株式会社、平成25年、p. 5。山内祐平は、ワークショップを「創ることで学ぶ活動」と位置付けており、筆者らの図工ワークショップも同様であると考ええる。
- ・引用2) 前掲書1)、pp. 97-98。続けて安斎勇樹は、新しい要素を取り込まずに同内容の実践を繰り返すことのデメリットについても言及している。実践は安定するが、運営が手続的になり、実践者にとっての試行錯誤や新しい発見は起こりにくくなると危惧している。筆者も安斎と同意見である。

#### 註

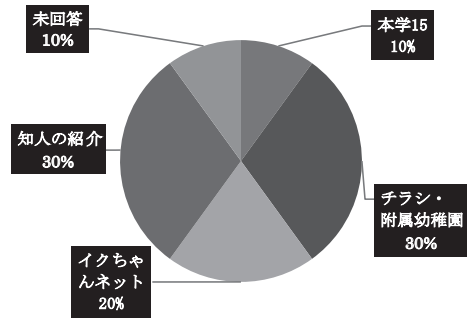
- 1) 広島文教大学『学生生活ハンドブック 2019年』平成31年、p. 51。教育学部教育学科では、学校や家庭・地域における教育・保育を主体的に創造する能力と態度を身に付けた幅広い職業人を育成することにより、地域社会への貢献を目指すことを教育研究上の目的として「教育学・保育学に関する専門的な知識や技能を修得し、主体性と協同性を持ったたくましい実践力のある人材を養成する」ことを目指していると記述されている。様々な現代的教育課題に対応するために、例えば学校・地域・社会を「つなぐ」教育の充実などを目指しており、この考え方は表9のように継続してきた図工ワークショップの趣旨にも通じると筆者は考える。

【表9：学内での図工ワークショップ一覧】

実施年度	題材〔タイプ〕 (モチーフ)	主材料にした身辺材	主な彩色・ 装飾方法
2007	アルミアート (魚)	アルミ缶	なし
2008	ハコニマル (トナカイ)	紙パック	ラッカー スプレー
	ランパック (ランプ)		
2009	ペットカー (生物・車)	ペットボトル・ ダンボール	ビニール テープ
2010	ツリース (クリスマスツリー)	ダンボール	色画用紙
2011	でこふれ (写真立て)	ダンボール	色画用紙
2012	ダンドール 〔スタンディングタ イプ・シッティング タイプ〕 (サンタクロース)	ダンボール	色画用紙
2013	パッカウス (家)	紙パック・ ダンボール	色画用紙
2014	パッケーキ (ケーキ・スイーツ)	紙パック	色画用紙
2015	ダンドール 〔ハンギングタイプ〕 (アーティなど)	ダンボール	色画用紙
2016	パッカー (アートナカイ)	紙パック	色画用紙
2017	オシャブーツ (ブーツ・靴)	円筒状紙製 パッケージ	色画用紙
2018	シンドル・ コビットモ (小人)	トイレッ トペーパーな どの芯	色画用紙
2019	マンネンダー (万年カレンダー)	ダンボール	色画用紙

なお、2019年度・学内でのワークショップ応募のきっかけは、グラフ7の通りである。知人からの紹介も理由としてあり、参加者同士のつながりが生まれていることがわかる。

- 2) 佐伯育郎「ありふれた身の回りの材料を興味深い教材へと変容させる指導法Ⅱ～2018年度・図工ワークショップを中心にした考察」(『広島文教教育第33巻』広島文教女子大学、平成31年、pp. 1-15)。13回にわたる学内・図工ワークショップの題材は表9の通りである。2018年度の題材であるコビットモとは、



グラフ7 【参加のきっかけ】

トイレットペーパーやキッチンペーパーなどの芯を用いた人形である。モールと紐などで骨組を作り、頭部・胴体に見立てた芯の内部に骨組を内蔵したものである。「シンドル (芯+新+ドル+モール)」と名付けた。シンドルを素体として、小人をモチーフに装飾を施したものを「コビットモ (小人+友達)」と命名した。

- 3) これまでの学外での図工ワークショップの実施年度、連携した外部施設などを簡潔にまとめると、次の表10になる。今回のように博物館だけでなく、美術館などとの架橋は従来から行ってきた。学内ワークショップで実践した題材を流用したり、アレンジしたりして実践してきた。2019年5月のカーネーションについては一から教材研究をすることで新たな題材を開発した。

【表10：学外での図工ワークショップ一覧】

実施時期	題材	連携した外部施設・団体等
2011年8月	ペットカー	広島県立美術館
2012年8月	アルミアート	広島県立美術館
2015年8月	ダンドール	みよし風土記の丘ミュージアム
2017年8月	ダンドール	世羅町教育委員会社会教育課
2019年5月	カーネーション	マリーエイド・サードテラス
2019年8月	コビットモ (和風バージョン)	ふくやま草戸千軒ミュージアム

- 4) 参加者対象のアンケート結果では、チラシ (保育園、小学校、図書館) で知ったというご家族や、ふくやま草戸千軒ミュージアムで直接知ったというご家族もあった。広報して下さった点について、筆者らは非常に感謝している。コビットモが一般に伝わらなかったため、和風に仕上げたコビットモの写



真を活用しつつ広報を強化してくださった。

- 5) 学生スタッフが iPad で撮影・編集したビデオレター①のシナリオは以下の通りである。図工ワークショップの導入、参加者に対する制作への動機付けとなることを期待した。このシナリオも、学生スタッフと筆者との話し合いから生まれたものである。

【ビデオレター①「アーティと2人の戦士」】

- ナレーション「ある日の朝、とってもかわいらしい少女が道を歩いていました。」
- アーティ「みなさんこんにちは！ 図工アイドル・アーティです！ あれ、あそこに誰がいるよ。あなたは誰？ ねえ、どうしたの？」
- ワスレンダー「俺の名前はワスレンダー。俺らの世界には、カレンダーがねえんだー。今日は、何の日か分からなくて、とっても困ってんだー。みんなの力を貸してほしいんだー。」
- アーティ「ワスレンダー、とってもかわいそうだね。カレンダーがなくて困っているね。どうしたらいいかな。そうだ！ みんなに、ワスレンダーのためにカレンダーを作ってもらいたいな！ みんな、素敵なカレンダーでワスレンダーを元気にしてあげようよ。がんばって作ってね！」
- ナレーション「それでは、今日はみんなでカレンダーを作りましょう！」

図工ワークショップの後半においてビデオレター②を上映し、終結として機能することを期待した。以下のシナリオの通り、ビデオレターの導入と終結とが対応するように意識した。

【ビデオレター②「アーティと2人の戦士」】

- アーティ「みなさんこんにちは！ 図工アイドル・アーティです！ みんなすてきなカレンダーができたね。ありがとう！ よーし、ワスレンダーにプレゼントしよう！」
- ワスレンダー「俺はワスレンダー。みんな俺のためにカレンダーを作ってくれたんだー。ありがとう！ 感謝するんだー。なんか元気がでてきたんだー。変身だー！」
- アーティ「あれ！ワスレンダーが変身したよ！」
- マンネンダー「やあみんな！ 僕は、暦戦士マンネンダーだー。みんなのおかげで元気になったんだー。このカレンダー、ずーっとつかえる

から便利だー。あ、今日は12月22日、僕の誕生日だー！」

- アーティ「そうなんだ！！ みんなでマンネンダーをお祝いしよう。さんはい！ お誕生日おめでとう！」
- マンネンダー「わあ嬉しいんだー。ありがとう！ 今日はとってもいい日になったんだー。みんなも、万年カレンダーを使ってずーっと楽しく過ごしてね！ レッツ、マンネンダー！」
- ナレーション「こうして、マンネンダーは万年カレンダーとともにずーっと幸せに暮らしたときさ。おしまい。」



【写真26・27：ビデオレター①②撮影の様子】

- 6) これまで通り、写真28のようなささやかな取組を継続することで、参加者に対する感謝の気持ちも忘れないようにしたい。



【写真3：5月・学外の題材カーネーション（学生・筆者作品）】



【写真4：材料・用具の配置（5月・学外）】

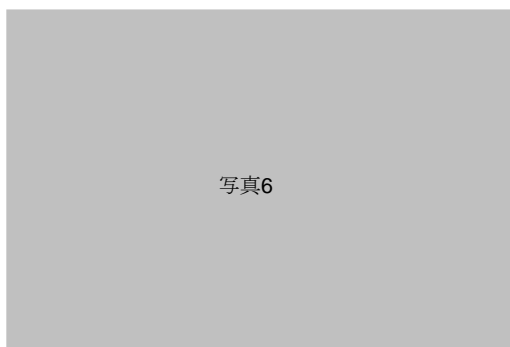


写真6

【写真6：参加者と学生スタッフ（5月・学外）】



写真7

【写真7：参加者と学生スタッフ（5月・学外）】



【写真9：和風「コビットモ」（学生・筆者作品）】

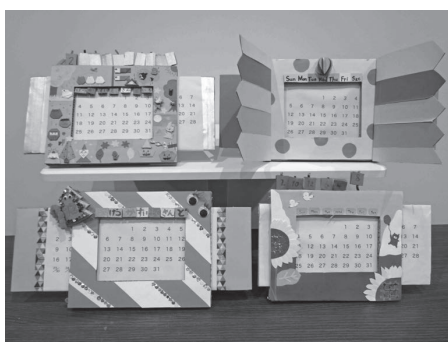


【写真10：和風コビットモ（参加者作品）】

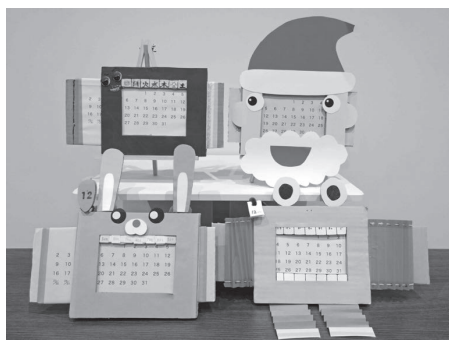


写真11

【写真11：8月・学外の参加者と学生の様子】



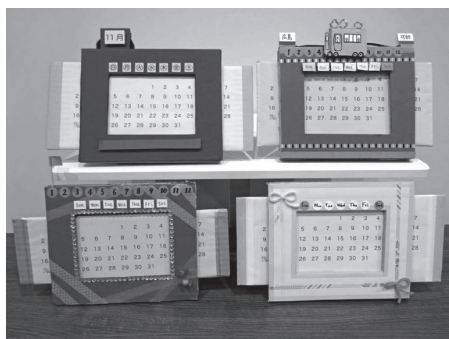
【写真13：マンネンダー（学生作品・ペーパークラフトタイプ）】



【写真14：マンネンダー（学生作品・フェイスタイプ）】



【写真15：マンネンダー（学生作品・ドローイングタイプ）】



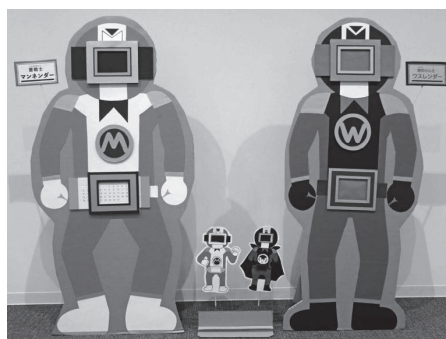
【写真16：マンネンダー（学生・筆者作品・オーソドックスタイプ）】



【写真17：マンネンダー（学生作品・アフィックスタイプ）】



【写真18：マンネンダー（学生作品・グリッタータイプ）】



【写真24：マンネンダーとワスレンダー（パネルとペーパーサート）】



写真11

【写真25：参加者・学生スタッフとの記念写真】



【写真28：参加者へのプレゼント（塗り絵とメダル）・お礼状】